



# 日本の「やる気回復法」提案書

横浜英和女学院高等学校3年

かとう まゆこ  
加藤 麻友子さん

やる気のない若者という言葉は耳にするが、やる気のない会社員までも今の社会で作られてしまったのだろうか。次世代を担う私達の未来までも、やる気不足で満ち溢れる事は避けなければならない。

そもそも「やる気」とは何であるか。私自身のやる気はまず、やったらやった分だけの成果がでる時に発揮される。例えばTOEICのテストがあるとして、その結果のために頑張ろうという気になる。二つ目のケースとしてチームプレイの時である。部活のとき、パートナーをカバーしたり、されたりして力をあわせることで本来の力を超えたプレーができることもあるのだ。そして三つ目は、多少自分の手に負えない事で壁にぶつかっても、周囲の励まし、共通の悩みを持つ他者の助け、そして頑張りを認めてくれる言葉が火事場の馬鹿力を発揮させる。(私の場合は、合唱コンクールの指揮者であった。)

さて「やる気」はやらされるよりも、自主的にやる気持ちが必要であるのは子供の勉強でおなじみのことである。だが、なぜ今大人の「やる気」低迷が問題となっているのだろう。

一つの理由として「下流社会」という本が売れるように、会社員の場合、自身より低所得者がいる事への変な安心感から、あくせく働かなくても生活に困らなければよいと考え始めた事。二つ目に株式運用によるマネーゲームの流行で、汗水かいて働くのがよいのか分からなくなった事。三つ目にアフターファイブやボランティアといった仕事以外の事の方が、やりがいや能力を発揮できると考え始めた事。四つ目に明確な理想像がない事が考えられる。中には社会

的使命感を感じ、明確な目標と共に出世を目指すものもいる。だが課題文にあるように32パーセントが使命感を感じず、75パーセントが無気力を感じる結果は、やる気の低迷が深刻化している表れである。

一方フリーターの場合はどうだろう。昔のフリーターは、まだ正社員になるのを決めかねる若者を呼んだが、今はかなり変化した。正社員になりたくてもなれないのである。特に今は正社員的大幅なカットをし、同等の仕事を非正規雇用者にさせる事は、彼らにとって不利な時代である。又、フリーター増加の影響は、課題文にあるように日本によくない事ばかりもたらす。第一に低所得者の増加によって税収は減り、国家は赤字になる。そして未婚・晩婚・少子化になる事で超高齢化社会に入り、さらに一人当たりの年金負担増加で生活が苦しくなる。第二に生活、精神面で苦しくなった人の犯罪が増加する。第三にフリーターばかり雇用していたせいで、技能訓練を受けた人が少なくなる。つまり会社のリーダーシップをとれる者が、その世代でいなくなる可能性が高いのである。さらなる悪循環は、規制緩和で失業率が減っても一つの職業に就職者が集まり、専門をもった者との所得格差は広がり、結局は低賃金で暮らさなければならない事にある。

だから、人々のやる気を上げるには、非正規雇用者のような不平等な待遇を改善する事にある。例えばオランダ・スウェーデン・ドイツでは、正社員を100とすると非正規雇用の時給は93ほどであり格差はない。これらの国を手本にして、日本もやる気に溢れる人を増やすため均等待遇を実現すべきである。改

善すべき点としては、同じ仕事をしている人には雇用形態に関係なく時給を等しくする事。次にパート労働者の厚生年金加入の可能な労働時間を下げる事。正社員の長時間労働をワークシェアにより減らす事。非正規雇用者を正社員として雇用する事。そして政府や民間の援助などで、技能訓練を受ける事ができるようにする事があげられる。特にワークシェアは正社員の過労死、精神的な疲れを防止し、新しい仕事も気持ちよくできるようにさせる事が可能である。

つけ加えて、私は中高の教育の問題も指摘したい。今の中高生は、私を含め政治経済が分からない子が多くなっている。中学の時、国会議事堂を見たりしたが、いったいどんなことを取り決めているのか分からなかった。おそらく一人で新聞、ニュースを見ても根本から分からず、ついていけないだろう。つまり今の政治が直接私たちに関わってくるものだという意識がないのである。これは政治が悪くなっても立て直す使命、つまり「やる気」の低迷に繋がると思われる。例えば会社でいうと経営が危なくなっても、どこかで大丈夫であるという甘い考えを持ってしまうのだ。だからフリーターが増加する今、中高生に自分の使命を考えさせるような教育が必要であるように思う。日本を知り、世界にも目を向け、自分の得意なことを発揮できる人が増えれば、おのずと使命感を持った人で溢れる国になるだろう。

これらの会社員、フリーター、教育の問題点を改善することで、国家は赤字をのがれ、日本は精神的にも経済的にも成長するだろう。

モチベーションクライシスの解決法を考えていると、どのような時も「やる気」のでる時はスポーツの時も遊びの時も仕事の時も変わらず、又、小学生でも高校生でも大人でもさほど変わらないのでは、と感じた。それは、私が「やる気回復法」を考える時、母が小学生に教えている方法の事を思い出し、どの世代にも当てはまると考えたからである。母が言う方法は、例えば掛け算のできない子にいきなり掛け算をやらせてみても、その時点ではその子はできない事で「やる気」を失っているのだからやらせてみても駄目だそうだ。だからできるものからやってみることで自信を持ち、掛け算にも挑戦できる意欲がでる。それから漢字練習などの単純作業も、カラーペン等を使った工夫で楽しくさせている。又、5年生同士でライバル心をもたせるようにし、宿題をたくさんやってきた成果をあげた子を誉め、意欲を高めさせている。又、そのがんばってやりとげた子の例を話し、他の子にも自信をもたせるそうだ。しかし何よりも本人の能力をきちんと認めて、そのプラス20パーセントの問題で本人がやりたいものからやらせる。そして徐々にステップアップし達成感を持たせながら、本人の次への「やる気」を引き出すという方法だ。

この母の教え方のように、会社も社員に自信を持たせ、チームワークやその人にあった方法を見極め、能力を認めることが大事なのであると考える。そして多くの人へ、その人に適したチャンスを与えることで向上心も芽生えるに違いない。